文京学院大学人間学部研究紀要 Vol.15, pp.71 ～ 81, 2014.3

父親のワーク・ライフ・バランスと夫婦関係および家族の精神的健康との関連
：幼児期の子どもをもつ家庭における検討

森下　葉子*

本研究の目的は, 幼児期の子どもをもつ家庭における父親のワーク･ライフ･バランスの様相, 父親のワーク・ライフ・バランスが夫婦関係，父親自身や配偶者，子どものストレスにどのように関連しているかを明らかにすることであった．420 組の父親および母親に対して質問紙調査を実施しデータを収集した．父親のワーク･ライフ･バランスについては,「仕事志向型」,「家庭・地域交流型」,「自分時間重視型」,「自分時間なし型」の 4 つのタイプを抽出した．専業主婦家庭においては，父親が「家庭･地域交流型」の場合，父親と母親の配偶者とのコミュニケーションへの満足度が高いこと，また,「仕事志向型」の父親のストレスが高いことが示された．共働き家庭においても,「仕事志向型」の父親のストレスが高いことが明らかになった．妻の就業の有無によって，父親のワーク・ライフ・バランスの家族への影響が異なることが明らかになり，妻の就業の有無の背景にある性別役割分業に対する価値観等の検討が今後の課題として残された．

Key Words：父親，ワーク・ライフ・バランス，夫婦関係，幼児期，ストレス

問題の背景と目的

女性の社会進出や生き方の多様化および少子化に伴い，男性も女性も働き方が見直されている．平成 19 年には「仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）憲章」および「仕事と生活の調和推進のための行動指針」が閣議決定された．こうした社会の変化をうけて，一家の稼ぎ手として仕事中心の生活を送ってきた男性の生き方も多様になりつつある（大野，2008；多賀, 2006）. 育児休暇を取得する男性は徐々に増え, 2012 年度の男性の育児休業取得率は 1.89％

＊人間学部児童発達学科

であった．しかし，子ども子育てビジョン（平成 22 年閣議決定）で掲げられた平成 29 年までの目標値 10.0% には現時点で遠く及ばない．さらに，育児休業期間をみると，女性が 10 ヶ月から 12 ヶ月未満（33.8％）が最も多いに対し，男性は 5 日未満（41.3％）が最も多く，1 ヶ月未満の取得がおよそ 75％を占める（厚生労働省，2013）．また，6 歳未満の子どものいる男性の育児時間は他の先進諸国と比較しても依然として短いこと，共働きであっても実際の育児・家事時間は妻の方が長いことが報告されており（佐藤，2013；総務省，2012），男性の育児への参画は途上であるといえる．

子どもの世話に精神的にも身体的にもエネルギーを要する乳幼児のいる家庭では，妻に取って夫の存在は大きく，夫には稼得責任に加え，家事，子どもの遊びや世話，妻への精神的サポート等様々な役割が期待されている（大和･斧出･木脇，2008）．こうした期待に添うことは，父親にとって容易なことではない．岩下（2011）は，女性が就職，結婚，妊娠・出産とライフイベントごとに社会における地位が変化するのに対し，男性は一貫して職業役割が彼らのアイデンティティを支えており，その職業役割意識の高さが長時間労働へ向かわせ，家事・育児役割の遂行を遠ざけるという悪循環になると指摘している．また，仕事中心であった生活を子どもの誕生を機に家庭との両立に移行するためには，職場の上司や同僚の価値観や業務量の調整を要する．久保・倉持・岸田・及川・田村（2013）は，仕事と家庭の両立についてストレスを感じている父親が半数以上いることを報告している．

それでは，ワーク・ライフ・バランスは，就学前の子どもをもつ父親自身あるいは配偶者や子どもの精神的健康，配偶者との関係にどのように影響するのだろうか．育児期の父親のワーク・ライフ・バランスについて調査した佐藤（2013）は，夫婦関係への満足感が高い父親はそうでない父親よりも子どものしつけや世話行為を積極的に行なっていることを明らかにしている．また，複数の役割を同時に担うことで生じる葛藤は，個人の精神的健康や配偶者との関係に悪影響を及ぼす（加藤，2004；小泉・菅原・前川・北村，2003）育児期の男性のライフスタイルについて調査した大野（2012）では，「仕事中心型」「仕事＋余暇型」「仕事＝家庭型（二重基準型）」「仕事＝家庭型（平等志向型）」と異なるライフスタイルを示し，各タイプによって家庭や育児への関与が異なる意味をもつことを見いだしている．

そこで本研究では，(1) 幼児期の子どもをもつ父親のワーク・ライフ・バランスの在り様のタイプを抽出し，(2) 各タイプと父親・母親それぞれの夫婦関係に対する認識との関連，(3) 各タイプと父親，母親，子どもそれぞれのストレスとの関連について検討することを目的とする．

方　法

【調査協力者】東京都，埼玉県，愛知県に在住の幼児をもつ家庭の母親および父親に対して調査を行った．

【調査期間および手続き】2011 年 9 月から 2011 年 12 月にかけて，各地域の幼稚園および保育所の協力のもと在園（所）の保護者に調査用紙を配布した．回収は，協力園との相談から郵送と園（所）を通しての回収と 2 通りの方法で行った．いずれの方法においても回収用の封筒を用意し，父親用・母親用の各調査票を個別の封筒に入れ，回収用封筒にまとめて提出するよう求めた．

【調査内容】

本調査は，妊娠期の夫婦から子どもが大学生の家庭を対象にした大規模調査であり，調査用紙には, 家族機能や子どもと家族の過ごし方等も含まれていた．以下では, 本論文の分析で扱った内容を示す．

1. 調査協力者の属性　協力者の属性として①母親および父親の年齢と職業，②家族構成，③子どもの年齢及び性別を尋ねた．

2. ワーク・ライフ・バランスの状態（22 項目）

仕事－家庭間のバランスの現状について，父親および母親に尋ねた．尺度は尾形（2010）を参考に構成した．

3. 夫婦関係（20 項目）

夫婦間の関係について，諸井（1997）を参考に「私は夫／妻と納得の行くまで話をすることが良くある」「私たちの夫婦関係は，強固である」「私は夫／妻を尊敬している」等 20 項目で構成し，「まったくあてはまらない」から「かなりあてはまる」の 5 件法で尋ねた．

4. 父親，母親，子どものストレス状態（20 項目）

清水・今栄（1981）の STATE-TRAIT ANXIETY INVENTORY 日本語版を参考に「私は平静である」「心配事が多い」等 20 項目で構成し，「まったくあてはまらない」から「かなりあてはまる」の 5 件法で尋ねた．子どものストレス状態については母親に回答を求めた．

結　果

調査協力者の属性

今回の調査では, 夫婦がそろっている家庭 420 世帯, 単親家庭 14 世帯からデータを収集した．本稿の目的を考慮し，夫婦がそろっている 420 世帯のデータを分析の対象とした．

父親の職業は，会社員が全体の 74.0% と最も多く，公務員（7.4%），自営業（5.5%），教員（1.7%），その他（7.1%）と続いた．年齢は 20 代が 8.1%，30 代が 64.3%，40 代が 25.7%，50 代が 0.7% であった（無回答 1.2%）．母親は専業主婦が最も多く全体の 66.9% を占め，パートタイム（12.6%），会社員（9.3%），教員（9.3%），公務員（1.9%），その他（5.2%）と続いた．年齢は 20 代が 12.1%，30 代が 72.9%，40 代が 14.0% であった（無回答 0.9%）．子どもの人数は 1 人が 37.9%, 2 人が 49.3%, 3 人が 10.5%, 4 人が 1.0%, 5 人が 0.5% であった（無回答 1.0%）．子どもの平均年齢は 4 歳 4 カ月，性別は男児が 48.8%，女児が 50.0% であった（無回答 1.2%）．

変数の整理

分析に用いる各変数について SPSS（Ver18）を用いて整理した.

① 父親のワーク・ライフ・バランス

全 22 項目について主因子法（Promax 回転）による因子分析を行ない，固有値と因子負荷量を基準に項目を取捨した結果，4 因子が抽出された．第 1 因子は，「私は休暇のとき，妻と一緒にいる時間を大切にしている」「私は休暇のとき, 家族のみんなを誘って出かけることがある」等の項目に高い負荷を示したことから「家族との交流」と命名した．同様に高い負荷を示した項目をもとに，第 2 因子は「仕事役割の家庭へのスピルオーバー」，第 3 因子は「地域との交流」，第 4 因子は「自分時間の充実」と命名した（Table1 参照）．各因子に高い負荷を示した項目の単純合計を項目数で除した値を尺度得点とした.

② 夫婦関係に対する認識

夫婦関係に対する認識に関する全 20 項目について，父親，母親のデータをまとめて因子分析（主因子法　Promax 回転）を行い構造化をはかった．その結果，3 因子が抽出された．第 1 因子は，「夫婦関係のあらゆるものを思い浮かべると，幸福だと思う」「私たちは，申し分のない結婚生活を送っている」等，夫婦関係への高い満足感がうかがえる項目に高い負荷を示したことから，「夫婦関係への満足感」と命名した．第 2 因子は妻 / 夫とのコミュニケーションに

Table1　*父親のワーク・ライフ・バランスの因子分析結果（主因子法，Promax 回転）*

項　目	Fac1	Fac2	Fac3	Fac4	h²
家族との交流（α=.76）					
①私は休暇のとき、妻と一緒にいる時間を大切にしている	**.735**	.011	−.043	−.112	.524
③私は休暇のとき、家族のみんなを誘って出かけることがある	**.669**	.049	.000	−.010	.447
④私は子どもの将来のことについてよく相談にのる	**.600**	.026	.046	−.026	.361
②私は家族で食事をするとき、仕事のことだけでなくいろいろな話をしている	**.572**	−.066	.030	.068	.350
⑲時間を作って妻と旅行などに行きたいと思う	**.514**	−.057	−.028	.108	.296
仕事役割の家庭へのスピルオーバー（α=.72）					
⑫私は仕事が上手く行っているときは、表情に出やすい	−.018	**.689**	−.055	.048	.485
⑪私は仕事が順調な時、家族とよく話をする	.078	**.685**	−.052	.116	.506
⑬私は仕事の話をするとき、生き生きとしていると思う	−.001	**.661**	.064	−.045	.441
⑧私は家族と話をするとき、仕事のことが多い	−.071	**.546**	−.004	−.079	.305
⑩私は休暇のときでも仕事のことが頭から離れないことがある	−.006	**.417**	.076	−.068	.183
地域との交流（α=.74）					
⑯町会など近隣の仕事に関わるのは楽しい	.015	.050	**.891**	.026	.795
⑰町会など近隣の仕事に関わるのはおっくうである*	−.037	.067	**−.679**	.041	.475
㉒休日など地域とのかかわりが多い方だ	−.045	.041	**.541**	.050	.291
自分時間の充実（α=.70）					
㉑自分の趣味など時間をとってゆっくりと楽しむのが好きだ	−.069	−.024	.019	**.807**	.632
⑳時間を作って、自分が楽しめることをしたいと思う	.100	−.017	−.032	**.689**	.510
⑭私は時間があるときは、自分の趣味を行うことがある	−.014	.008	.046	**.543**	.290
因子寄与	2.012	1.884	1.594	1.559	
因子間相関　Fac2	−.025	-	-		
Fac3	.045	.038	-		
Fac4	.121*	.042	−.064		

＊逆転項目

削除項目　⑤私は忙しくて家族との会話が少ない
⑥私は休暇のとき、家族とかかわらず、一人でのんびりしていることがある
⑦私は家族に自分の生き方を話すことがある
⑨私は仕事のことで悩んだり喜んだりしている
⑮日曜日などは自分の時間を作って楽しむ
⑱自分の趣味など色々とかかわる時間がない

関する項目に高い負荷を示したことから「コミュニケーション（何でも話せる）」と命名した．第 3 因子は，相手に対する要望に関する項目に高い負荷を示したため「夫 / 妻への要望」と命名した（Table2 参照）．①と同様に尺度得点を作成した．

③　各家族成員のストレスの状態

父親，母親，子どものストレスに関する項目について，父親，母親，子どものデータをまとめて因子分析（主因子法，Promax 回転）を行ない，2 因子を抽出した．第 1 因子は「私は安心している（逆転項目）」「私はイライラしている」「私は不安である」などストレスを現在抱いているかに関する項目に高い負荷を示したことから「現在のストレス」と命名した．また第 2 因子は「私は困難なことが重なると圧倒されてしまう」「私はささいなことに思いわずらうことがある」などストレスを感じやすい性格特性かに関する項目に高い負荷を示したことから「ストレスの感じやすさ」と命名した（Table3 参照）．①と同様に尺度得点を作成した．

Table2　*夫婦関係に対する認識の因子分析結果（主因子法　Promax回転）*

項　目	Fac1	Fac2	Fac3	h^2
夫婦関係への満足感（α=.94）				
⑧私たちの夫婦関係は強固である	**.901**	−.040	.001	.761
⑨夫／妻との関係によって、私は幸福である	**.878**	.005	−.035	.769
⑦私と夫／妻の関係は、非常に安定している	**.861**	.031	−.003	.781
⑪私は夫婦関係のあらゆるものを思い浮かべると、幸福だと思う	**.851**	−.028	−.022	.684
⑥私たちは、申し分のない結婚生活を送っている	**.847**	−.057	.046	.665
⑬夫婦でお互いを思いやっている	**.794**	.026	−.030	.654
⑲私は夫／妻を尊敬している	**.718**	.008	−.003	.523
⑳私は夫／妻とできるだけ一緒に出かけたり、旅行がしたい	**.635**	−.010	.053	.408
⑫私は夫婦の会話を大事にしている	**.607**	.166	−.087	.524
⑤私は夫／妻から受け入れられている	**.488**	.234	.066	.480
コミュニケーション（α=.78）				
③私は夫／妻とはなんでも話ができる	.058	**.845**	−.020	.782
②夫／妻にはいろいろな話ができる	.104	**.814**	−.008	.793
④夫／妻には頼みたいことがあってもなんとなく言い出しにくい＊	.024	**−.498**	.034	.225
①私は夫／妻と納得のいくまで話をすることがよくある	.187	**.455**	.026	.373
夫／妻への要望（α=.76）				
⑯夫／妻には家庭や家族のことについてできるだけ関心を持ってほしい	.007	.073	**.805**	.681
⑰夫／妻には私の話をよく聞いてほしい	.034	.013	**.803**	.661
⑮夫／妻には私の考えを受け入れて尊重してほしい	.040	-.075	**.630**	.387
⑱夫／妻には子どもに今以上にかかわりを持ってほしい	−.104	-.056	**.500**	.242
因子寄与	7.577	5.680	2.242	
因子間相関　Fac2	.668**	-	-	
Fac3	.127	.144**	-	

＊逆転項目

削除項目　⑩私は、まるで自分と妻/夫が同じチームの一員のようであると、ほんとうに感じている
⑭私が悩んでいるとき妻/夫は相談相手になってくれる

Table3 *ストレス状態の因子分析結果（主因子法　Promax回転）*

項　目	Fac1	Fac2	h^2
現在のストレス(α=.89)			
②私は安心している*	**−.839**	.147	.579
⑨私はリラックスしている*	**−.733**	.049	.497
⑦私はイライラしている	**.702**	.058	.544
⑥私はピリピリしている	**.697**	.050	.530
⑤私は気分がよい*	**−.694**	.125	.394
④私は不安である	**.677**	.079	.528
⑧私はなにかしら緊張している	**.659**	.073	.497
①私は平静である*	**−.641**	.031	.389
③私は何かまずいことが起こりそうで心配である	**.576**	.082	.395
ストレスの感じやすさ(α=.89)			
⑭私は困難なことが重なると圧倒されてしまう	−.069	**.799**	.577
⑱私はささいなことに思いわずらうことがある	.009	**.791**	.634
⑮実際には大したこともないことが気になってしかたがない	.007	**.787**	.626
⑯私はものごとを難しく考える傾向がある	.077	**.714**	.581
⑬私はすぐに決心がつかず迷いやすい	−.112	**.706**	.418
⑳身近な問題を考えるとひどく緊張し混乱する	.236	**.577**	.551
⑲私はひどくがっかりしたときには気分転換ができない	.170	**.574**	.474
⑰私はやっかいなことは避けて通ろうとする	−.144	**.573**	.251
因子寄与	5.910	5.575	
因子間相関 Fac2	.548**	-	

＊逆転項目

削除項目　⑩私は心配事が多い
⑪私は疲れやすい
⑫私は他の人と同じくらい幸せであったならと思う

幼児期の子どもをもつ父親のワーク・ライフ・バランスの在り様

父親の回答したワーク・ライフ・バランスの各因子の下位尺度得点についてクラスター分析（平方ユークリッド距離，Ward 法）を実施した．デンドログラムを参考に 3 ～ 5 クラスターでの分類が可能であったが，ワーク･ライフ･バランスの特徴が明確で解釈しやすい 4 クラスターを採用した．各クラスターの特徴が明確になるようワーク・ライフ・バランスの下位尺度得点を Z 得点に修正し，クラスターごとに示した図が Figure1 である．それぞれの特徴から，「仕事志向型」,「家庭・地域交流型」,「自分時間重視型」,「自分時間なし型」とした．

「仕事志向型」は他のクラスターよりも「仕事役割の家庭へのスピルオーバー」得点が高く，「家族との交流」および「地域との交流」得点は 2 番目に低い．休日も仕事のことが頭から離

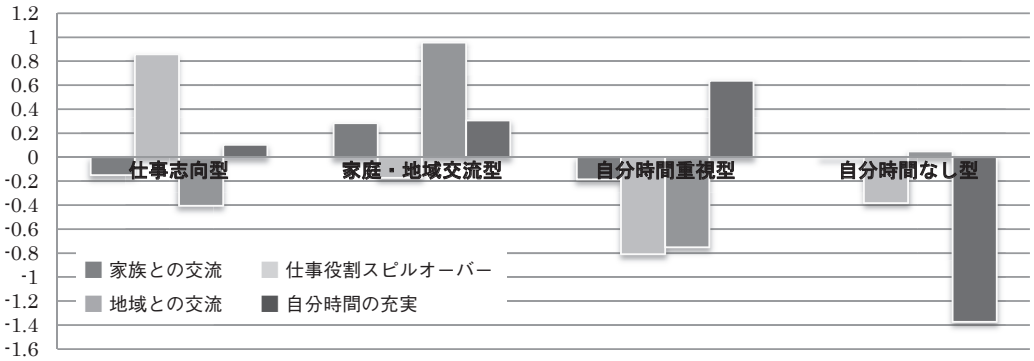

Figure1　クラスター別にみる父親のワーク・ライフ・バランス各因子のZ得点

れない, 家族に対しても仕事の話をしてしまう等, 仕事中心の生活を送るタイプである.「家庭・地域交流型」は他のクラスターよりも「家族との交流」,「地域との交流」得点が高いことが特徴である. また, 自分の趣味にあてる時間もほどほどにあり, 仕事よりも生活が充実しているタイプである.「自分時間重視型」は他のクラスターよりも「自分時間の充実」得点が高く,「家族との交流」,「仕事役割の家庭へのスピルオーバー」,「地域との交流」が低い特徴をもつ. 父親役割や仕事役割へのコミットメントが低く, 何よりも自分の趣味を楽しむタイプである.「自分時間なし型」は「家族との交流」「地域との交流」得点は平均的だが,「仕事役割の家庭へのスピルオーバー」,「自分時間の充実」得点が低い. 特に「自分時間の充実」得点は平均を大きく下回っている. 仕事や家庭・地域への関与はほどほどだが, 仕事や自分の趣味活動には消極的である.

以下では, 専業主婦家庭と共働き家庭ごとに分析を進める. なお, 母親の職業の有無で各クラスターの度数分布に有意な差は見られなかった（χ^2=.251, n.s.）.

ワーク・ライフ・バランスの各タイプと父親・母親の夫婦関係に対する認識との関連

専業主婦家庭と共働き家庭について, 父親のワーク・ライフ・バランスのタイプが父親および母親それぞれの夫婦関係に対する認識にどのように関連しているかを明らかにするために, 父親のワーク・ライフ・バランスの 4 つのタイプを独立変数, 父親および母親の夫婦関係各因子の尺度得点を従属変数として一元配置の分散分析を行った. その後の検定には多重比較（Tukey 法）を用いた.

その結果, 専業主婦家庭では, 父親と母親の夫婦関係に対する認識についてワーク・ライフ・バランス間の有意な差が認められた. 具体的には,「自分時間重視型」よりも「家庭・地域交流型」の方が父親の「コミュニケーション」得点が有意に高かった（$F(3,260)=3.16, p<.05$）. また,「仕事志向型」の夫をもつ母親よりも「家庭・地域交流型」の夫をもつ母親の方が「コミュニケーション」得点が有意に高かった（$F(3,261)=3.34, p<.05$）（Table4 参照）. 父親が家庭や地域との交流に重きを置いている場合, 父親自身も母親も配偶者とのコミュニケーションへの満足が高いことが示された. 一方, 共働き家庭では各タイプ間で有意な差は認められなかった（Table5 参照）.

ワーク・ライフ・バランスの各タイプと父親, 母親, 子どものストレスとの関連

父親のワーク・ライフ・バランスのもち方と各家族成員のストレスとの関連を明らかにするために, 専業主婦家庭と共働き家庭ごとに父親のワーク・ライフ・バランスの 4 タイプを独立変数, 父親, 母親, 子どものストレス各因子の尺度得点を従属変数として一元配置の分散分析を行い, その後の検定として多重比較（Tukey 法）を行った. その結果, 専業主婦家庭では,「自分時間なし型」よりも「仕事志向型」の方が父親の「ストレスの感じやすさ」得点が高かった（$F(3,255)=3.15, p<.05$）（Table4 参照）. また, 他の家族成員のストレスとの関連については, 子どもの「現在のストレス」について有意な差がみられ,「自分時間重視型」の父親の子どもは「仕事志向型」「家庭・地域交流型」の子どもよりもストレス得点が高い傾向が示された（$F(3,254)=3.43, p<.05$）.

一方，共働き家庭でも「仕事志向型」の父親のストレスは他のタイプの父親よりも高いことが示された．具体的には，「家庭・地域交流型」よりも「仕事志向型」の父親の方が「現在のストレス」得点が有意に高かった（$F(3,131)=3.43, p<.05$）．さらに，「ストレスの感じやすさ」得点についても「仕事志向型」の父親は「家庭・地域交流型」および「自分時間重視型」の父

Table4　*父親のワーク・ライフ・バランスのタイプ間の夫婦関係に対する認識、各家族成員の精神的健康の平均値の比較（専業主婦家庭）*

		1.仕事志向型 (n=87) M(SD)	2.家庭・地域交流型 (n=77) M(SD)	3.自分時間重視型 (n=51) M(SD)	4.自分時間なし型 (n=50) M(SD)	検定結果
父親	夫婦関係に対する認識					
	夫婦関係への満足感	4.10(.67)	4.26(.62)	3.97(.68)	4.23(.70)	$F(3,258)=2.39^{\dagger}$ 2>3†
	コミュニケーション	3.72(.73)	3.90(.70)	3.51(.76)	3.84(.71)	$F(3,260)=3.16^{*}$ 2>3*
	妻への要望	3.53(.73)	3.43(.86)	3.29(.82)	3.21(.90)	$F(3,260)=1.97$
	ストレス					
	現在のストレス	2.55(.60)	2.34(.66)	2.37(.73)	2.26(.57)	$F(3,258)=2.58^{\dagger}$ 1>4†
	ストレスの感じやすさ	2.69(.76)	2.45(.73)	2.64(.65)	2.33(.81)	$F(3,255)=3.15^{*}$ 1>4*
母親	夫婦関係に対する認識					
	夫婦関係への満足感	4.00(.68)	4.19(.67)	3.94(.78)	4.15(.75)	$F(3,260)=1.71$
	コミュニケーション	3.72(.80)	4.06(.74)	3.76(.97)	4.05(.83)	$F(3,261)=3.34^{*}$ 1<2*
	夫への要望	4.10(.64)	3.98(.70)	3.92(.87)	3.90(.74)	$F(3,260)=1.14$
	ストレス					
	現在のストレス	2.48(.69)	2.48(.64)	2.64(.80)	2.63(.90)	$F(3,253)=.93$
	ストレスの感じやすさ	3.10(.79)	2.86(.80)	3.18(.74)	3.18(.82)	$F(3,255)=2.50^{\dagger}$ 2<4†
子ども	ストレス					
	現在のストレス	1.93(.59)	1.92(.54)	2.20(.66)	2.12(.06)	$F(3,254)=3.43^{*}$ 3>1, 2†
	ストレスの感じやすさ	2.47(.79)	2.27(.70)	2.50(.62)	2.50(.85)	$F(3,253)=1.46$

*$p<.05$ †$p<.10$

Table5　*父親のワーク・ライフ・バランスのタイプ間の夫婦関係に対する認識、各家族成員の精神的健康の平均値の比較（共働き家庭）*

		1.仕事志向型 (n=43) M (SD)	2.家庭・地域交流型 (n=39) M (SD)	3.自分時間重視型 (n=29) M (SD)	4.自分時間なし型 (n=25) M (SD)	検定結果
父親	夫婦関係に対する認識					
	夫婦関係への満足感	4.07(.74)	4.14(.68)	4.07(.84)	4.00(.74)	$F(3,131)=.17$
	コミュニケーション	3.74(.85)	3.83(.76)	3.57(1.01)	3.75(.66)	$F(3,131)=.55$
	妻への要望	3.33(.96)	3.59(.64)	3.47(.81)	3.31(.75)	$F(3,131)=.96$
	ストレス					
	現在のストレス	2.72(.69)	2.22(.73)	2.50(.74)	2.44(.68)	$F(3,131)=3.43^{*}$ 1>2*
	ストレスの感じやすさ	2.98(.81)	2.43(.70)	2.50(.55)	2.57(.90)	$F(3,132)=4.34^{**}$ 1>2, 3*
母親	夫婦関係に対する認識					
	夫婦関係への満足感	3.83(.81)	3.84(.89)	3.96(.93)	4.17(.64)	$F(3,132)=1.08$
	コミュニケーション	3.85(.73)	3.65(.87)	3.93(.96)	3.90(.56)	$F(3,131)=.89$
	夫への要望	4.01(.68)	3.75(.72)	3.97(.84)	3.87(.74)	$F(3,132)=.98$
	ストレス					
	現在のストレス	2.59(.78)	2.63(.70)	2.54(.66)	2.60(.79)	$F(3,131)=.09$
	ストレスの感じやすさ	2.86(.79)	3.02(.84)	2.81(.77)	2.96(.82)	$F(3,132)=.45$
子ども	ストレス					
	現在のストレス	2.05(.60)	2.12(.72)	1.98(.58)	1.99(.59)	$F(3,129)=.35$
	ストレスの感じやすさ	2.20(.73)	2.48(.94)	2.30(.94)	2.19(.71)	$F(3,127)=.95$

**$p<.01$ *$p<.05$

親よりも有意に高かった（$F(3,132)=4.34$, $p<.01$）（Table5 参照）．このことから妻の職業の有無にかかわらず，「仕事志向型」の父親は，他のタイプの父親に比べてストレス状態に晒されやすいことが示された．

考　察

本研究では幼児期の子どもをもつ父親のライフ・ワーク・バランスについて，「仕事志向型」，「家庭・地域交流型」，「自分時間重視型」，「自分時間なし型」の 4 つのタイプを抽出した．

父親のライフ・ワーク・バランスのとり方と夫婦関係に対する認識との関連は，専業主婦家庭においてのみ確認された．ワーク・ライフ・バランスのタイプ間で差異が認められたのは夫／妻とのコミュニケーションへの満足感であり，具体的には「家庭・地域交流型」の父親の方が「自分時間重視型」の父親よりも，また，「家庭・地域交流型」の夫をもつ妻の方が「仕事志向型」の夫をもつ妻よりも，相手と十分にコミュニケーションがとれていると認識していた．子どもが幼い頃は生活時間が子ども中心になり，外で働く夫と家で子どもと過ごす妻との間で生活時間にすれ違いが生じる．その状況のなか「仕事志向型」の父親のように家庭でも仕事の話が多かったり，「自分時間重視型」の父親のように余暇時間を自らの趣味に費やしてしまうと妻も夫もコミュニケーション不足を感じるのだろう．

また，父親のワーク・ライフ・バランスによって夫婦関係への満足感に差が生じること，特に仕事，家庭，地域への関与が低く余暇活動に積極的である「自分時間重視型」の夫をもつ妻の夫婦関係満足感が他のタイプの父親よりも低くなることが予測された．しかし，本調査の結果では，専業主婦家庭の父親の満足感において「家庭･地域交流型」の方が「自分時間重視型」よりも有意に高い傾向が示されるにとどまった．「家庭･地域交流型」の父親の満足感が高かったことについては，佐藤（2013）では夫婦関係への満足感が父親の育児行動を促すことが明らかにされており，家庭や地域活動に積極的に関与することで夫婦関係への満足感が増し，またそのことが家庭・地域関与への動機づけにつながると考えられる．では，なぜ「自分時間重視型」と他のタイプ間で妻の夫婦関係満足感に差が認められなかったのだろうか．このタイプの夫をもつ妻は，夫の生活スタイルについてある程度納得しており，夫の行動を容認している可能性が考えられる．今後，妻の価値観と合わせて検討していく必要があるだろう．また，各タイプの夫婦関係満足感の平均値に注目すると，専業主婦家庭では，統計的に有意差は認められなかったものの，父親が「自分時間重視型」の場合，夫婦関係満足感が父母ともに最も低い．一方，共働き家庭では，父親は「仕事志向型」と並んで夫婦関係満足感が 2 番目に高く，母親においては「自分時間なし型」に次いで高かった．これらのことから母親が有職か無職かによって，「自分時間重視型」の父親に対する受け止め方が異なる可能性が考えられる．

父親のワーク・ライフ・バランスと各家族成員のストレスとの関連については，専業主婦家庭では，「自分時間なし型」よりも「仕事志向型」の父親の方がストレスを感じやすく，また

現在もストレスを抱えている傾向が示された．共働き家庭においても，「仕事志向型」の父親のストレスが「家庭・地域交流型」や「自分時間重視型」に比べて高かった．仕事に偏った生活が父親自身の精神的健康を低下させることが示された．幼児をもつ専業主婦家庭の父親を対象にした久保ほか（2013）では，仕事中心の父親であっても自分の時間を確保できていないという実感をもっており，それが仕事と育児の両立におけるストレスを生じさせていた．本調査の協力者は30代と40代が大半であり，この年代は労働時間が長い（総務省，2012）.「仕事志向型」の父親のなかにも家事や育児の両立を望み，葛藤している者もいる可能性は十分考えられる．今後，性役割分業意識や役割間葛藤などの変数を加えてさらに調査・分析することが望まれる．

さらに専業主婦家庭において父親が「自分時間重視型」である方が「仕事志向型」,「家庭・地域交流型」よりも，子どもの現在のストレスが高い傾向がみられた.「仕事志向型」の父親を稼ぎ手としての役割を担う従来のタイプだと解釈すると,「仕事志向型」も「家庭・地域交流型」も費やす時間や態度は異なるが父親の役割に積極的にコミットメントしている. 一方,「自分時間重視型」の父親は仕事役割も家庭役割も低い．田中・中澤・中澤（1996）では，父親の物理的不在に機能的不在が伴ったときに妻が子育てに困難を抱えやすくなり，それが妻のストレスを高めるとしている．本研究の対象は両親が同居しており物理的には存在しているが,「自分時間重視型」の父親は，その育児・家事関与が求められる乳幼児期の家庭においては機能的には不在であるといえる．さらに専業主婦家庭のこのタイプの父親は夫婦関係への満足感が他のタイプに比べて低い傾向がある．母親の夫婦関係満足感も統計的に有意ではないが他のタイプよりも低い. そうした両親の状況が子どものストレスにつながっているのではないだろうか.

共働き家庭では，父親のワーク・ライフ・バランスのタイプ間で，母親と子どものストレスに有意差は認められなかった．共働き家庭の場合，母親のワーク・ライフ・バランスもいくつかに分類できる可能性がある．母親自身のワーク・ライフ・バランスが，母親や子どものストレスに影響を及ぼすことも考えられる．この点については今後，さらに検討していきたい．

以上，本研究では幼児期の子どもをもつ家庭における父親のワーク・ライフ・バランスの在り様を抽出し，それらと夫婦関係への認識や家族成員のストレスへの関連について検討してきた．時間やエネルギー等，限られた資源をどこにどの程度割り当てるべきか．子どもの誕生により新しい役割を担った父親，母親が最初に直面する課題のひとつである．またその配分は，自分の意志のみで決定できるものではなく, 配偶者との考えの擦り合わせや職場の制度や風土，育児のサポート資源の有無など様々な環境因が絡む．その環境因一つひとつを把握し，折り合いをつけながら役割を遂行していくことが親役割の受容につながる．そして，子どもの成長とともにワーク・ライフ・バランスの取り方も変容していくと思われる．今後，児童期以降の子どもをもつ家庭を対象とした調査が望まれる．また，今回の調査ではデータ数の関係から母親の就業の有無別に分析を進めたが，女性の働き方や就業理由は多様である．今後，データ数を増やし，さらに詳細な分析を進める必要があると考える．

引用文献

岩下好美.（2011）. 家庭役割と職業役割の調和 : 父親の家事・育児参加. Proceedings : 格差センシティブな人間発達科学の創成, 16, 13-22.

加藤容子 (2004). 夫婦ペア・データによるワーク・ファミリー・コンフリクトの検討. 経営行動科学学会年次大会発表論文集, 7, 174 − 180.

小泉智恵･菅原ますみ･前川暁子･北村俊則 (2003). 働く母親における仕事から家庭へのネガティブ・スピルオーバーが抑うつ傾向に及ぼす影響. 発達心理学研究, 14, 272-283.

厚生労働省.（2013）. 平成 24 年雇用均等基本調査.
（http://www.mhlw.go.jp/toukei/list/dl/71-24e.pdf 閲覧日 2013/8/30）

久保恭子・倉持清美・岸田泰子・及川裕子・田村毅.（2013）. 幼児を持つ父親のワークライフバランスとその関連要因. 東京学芸大学紀要総合教育科学系, 64, 203 − 209.

諸井克英 .（1997）. 子どもの眼からみた家庭内労働の分担の衡平性—女子青年の場合. 家族心理学研究, 11, 69-81.

尾形和男.（2010）. 父親のワーク･ライフ･バランスについての一考察:夫婦関係, 家族メンバーの生活, 子どものワーク・ライフ・バランス観との関係. 愛知教育大学研究報告教育科学編, 59, 99-106.

大野祥子.（2008）. 育児期男性の生活スタイルの多様化：“稼ぎ手役割”にこだわらない新しい男性の出現. 家族心理学研究, 22, 107 − 118.

大野祥子 .（2012）育児期男性にとっての家庭関与の意味：男性の生活スタイルの多様化に注目して. 発達心理学研究, 23, 287-297.

佐藤淑子.（2013）. 育児期家族の生活と心理. 鎌倉女子大学紀要, 20, 1 − 10.

清水秀美・今栄国晴.（1981）. STATE-TRAIT ANXIETY INVENTORY の日本語版 (大学生用) の作成. 教育心理学研究, 29, 348-353.

総務省.（2012）. 平成 23 年社会生活基本調査.
（http://www.stat.go.jp/data/shakai/2011/pdf/houdou2.pdf 閲覧日 2013/8/30）

多賀太.（2006）. 男らしさの社会学：揺らぐ男のライフコース. 世界思想社.

田中佑子・中澤潤・中澤小百合.（1996）. 父親の不在が母親の心理的ストレスに及ぼす影響：単身赴任と帯同赴任の比較. 教育心理学研究, 44, 156-165.

大和礼子･斧出節子･木脇奈智子.（2008）. 男の育児･女の育児:家族社会学からのアプローチ. 昭和堂.

謝　辞

本研究の実施にあたり, 科学研究費（基盤研究 (C)(1) 課題番号 23530661, 研究代表者：尾形和男）を受けた. 調査の実施にあたりご協力を頂いた多くのみなさまに心より感謝申し上げます.

（2013.9.25 受稿, 2013.10.15 受理）